

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18520110  
 研究課題名（和文） イコノロジーの再生  
 ——イメージ解釈の包括的な基礎理論をめざして——  
 研究課題名（英文） Restoration of Iconology:  
 Toward a Comprehensive Basic Theory of Image Interpretation  
 研究代表者  
 加藤 哲弘（KATO TETSUHIRO）  
 関西学院大学・文学部・教授  
 研究者番号：60152724

研究成果の概要：本研究の目的は、イコノロジーという、名前だけは極めて広く知られていながら、その理論的内実への本格的な論究があまりなされてこなかった解釈理論に対して、実践的方法論から哲学的考察に至るまでの、広く、かつ深い視点からの検討を試みることにあった。雑誌論文や学会発表などで報告したように、この当初の目的は、多少の欠落や遅延はあるものの、ほぼ達成できたと思われる。今後も、この方向でさらに検討を継続したい。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	510,000	3,610,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学（美学・美術史）

キーワード：イコノロジー、イメージ、画像解釈、美学、ヴァールブルク、パノフスキー

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 研究申請の背景

①報告者（研究代表者：加藤哲弘）は1999年に東京で開催された「記憶された身体——アビ・ヴァールブルクのイメージの宝庫」展への協力、ありな書房版「ヴァールブルク著作集」の翻訳などを通じて、近代イコノロジーの創始者であるヴァールブルクや、パノフスキーを始めとするその後継者たちテキストやその内容に関する理解を深めていた。

②同時に報告者は、『絵画の探偵術』や『ヨーロッパ美術史』などの教科書執筆によって西洋美術史上の諸作品の構成要素やその機

能についての基本的な知識の整理を行い、西洋や日本の伝統的美術作品や、写真、絵本、コミック、アニメ、ゲームなど、既成の枠を超えたさまざまなイメージ群についても、ほぼ毎年、大学での講義や学生指導などによって、分析経験を積み重ねていた。そのなかで、解釈の方法論としてのイコノロジーの限界についても強く感じるようになっていた。

③また報告者は、ヴァールブルク学派の研究者たちに関係する資料を保存するロンドン大学ウォーバーグ研究所、「イコノロジー」誕生の地とも言えるハンブルクに現存するヴァールブルク・ハウス（現在はハンブルク

大学政治図像学研究室)をはじめとして、多くの在欧研究拠点をすでに何度か訪れて調査経験を積んでおり、多くの研究者たちとの情報交換や意見交換のなかで、現代におけるイメージ解釈理論へのイコノロジーの適用の問題について考察したいと考えるようになった。

④報告者は、2003年から2005年まで「美学における啓蒙と野蛮——現代的視点からの美学史の再構築のために」(科学研究費補助金基盤研究(C)(2))において、近現代の美学や芸術における「啓蒙」的視点と「未開」的視点の交錯について研究を行った。そのなかで、ヴァールブルクとその思考の哲学的背景について考察を深めたことも、この研究計画を発想するにあたっての重要な出発点のひとつであった。

## (2) 研究申請の動機

美術史の方法論としてのイコノロジーという名前は、研究者たちにはよく知られている。また専門家でなくても、イメージ一般の解釈理論に興味を持つ人であれば、どこかでこの用語を耳にしたことがあるに違いない。ところが、この「イコノロジー」が、それ自体いったいどのようなものであるのかについては必ずしも共通の理解があるわけではない。たしかに「イコノロジーによる研究」(Studies in Iconology)は、このタイトルを持つ著作を書いたパノフスキー以来、美術史学の「国際様式」(ヴァルンケ)として、ヨーロッパ美術の研究だけではなく、地球上のさまざまな「図像」に対して応用され、多くの研究成果が積み重ねられてきた。しかしその一方で、「イコノロジーについての研究」(Studies on Iconology)に関しては、歴史的な概観や、あるいは、あの有名な「図式」についてのパノフスキーの主張に言及するだけのものが多く、一部の例外を除けば、その理論としての特性を掘り下げた研究が充分になされているとは言えない状況にある。申請者が本研究を構想するに至った動機は、何よりもまず、イコノロジーをめぐるこのような理論的空白状況がいまだに放置されていると感じたことにある。

## 2. 研究の目的

本研究の課題申請時における当初の目的は、前項の「動機」のところで言及した「理論的空白状況」を解決することにある。このような状況が生み出された背景には、少なくとも以下に述べる3つの事態が絡んでいるように思われた。そのそれぞれの問題点を改善することで「イコノロジーの再生」をめざすことが本研究の目的に他ならない。

(1) まず、驚くべきことに、この言葉を最初に使い始めた、いわゆるヴァールブルク学派の学者たちは、じつは、この用語を実際には

それほど頻繁に用いるわけではない。パノフスキーがこの語の意味について具体的な説明を加えるのは1955年になってからのことであるし、いつも枕詞のように「近代イコノロジーの祖」として語られるヴァールブルクにしても、この言葉を使うのは、1912年の、いわゆるスキファノイア講演など、ほんのわずかのケースにすぎない。ここで必要なのは、テキストの精密な解読にもとづきながら、イコノロジーをめぐるこれまでの議論の正確な理解を提供することである。そのためには、たんなる主張の敷衍や解説ではなく、言葉とイメージをめぐる哲学的基盤までも視野に入れた考察が不可欠になると思われた。

(2) 第二に、イコノロジーは、方法論としてイコノグラフィと直接に結びつけられ、多くの場合は、ほとんど区別なしに用いられてきた。その結果、イコノロジーは、これまた問題含みの「様式論」ないしは「形態分析」という方法論と、単純な二元論的対立のなかで理解されることになる。後述するように、とくにヴァールブルクは、むしろこのようなさまざまな方法論を統合したところに解釈の理念を見出そうとしていたわけだが、そのような事態は、図式的な理解によって隠蔽されてしまった。この問題点の解決のためには、「様式論」を含む、美術史や視覚文化研究におけるイメージ解釈にかかわる多くの方法論の射程を十分に検討したうえで、それらの長所を包括的な「イコノロジー」のなかに吸収していくことが不可欠である。

(3) 第三に、イメージ研究一般における「方法論」意識の立ち遅れについても指摘をしておかなければならない。ガーダマーが主張したように、人文学において「方法」は「真理」に直結する通路ではない。しかし、その一方で、価値が相対化した20世紀以後の人文学研究者たちは、自らの方法上の立場を反省するようにつねに迫られている。イメージ研究の場合でもそうだが、「方法」を便利な道具ではなく、自らの解釈手続きに対する批判的意識化の糸口にすることが求められているわけである。この最後の問題点を解決するために、方法論をめぐる解釈学的な議論を消化したうえで、解釈者自身の研究姿勢や、解釈プロセス内部での位置確認を可能にするような、ある種のガイドラインないしはチェックリストを作成するというプロジェクトが構想された。

## 3. 研究の方法

「研究の目的」の項で述べたように、本研究の課題は、以下の3点にある。

(1) いわゆるヴァールブルク学派に属する研究者たちの残したテキストを精密に解読し、哲学的背景を視野に入れながら、その正確な解釈を提供すること。

(2) 「様式論」を含む、美術史や視覚文化研究におけるイメージ解釈にかかわる多くの方法論の射程を十分に検討したうえで、それらの長所を包括的な「イコノロジー」のなかに吸収していくこと。

(3) 方法論をめぐる解釈学的な議論を消化したうえで、解釈者自身の研究姿勢や、解釈プロセス内部での位置確認を可能にするような、ある種のガイドラインないしはチェックリストを作成すること。

①第一の課題解決のために考えられたのは、できるだけ多くの研究者たちが残したテキストを可能なかぎり精密に読みこなすという方法である。具体的には、まず、ヴァールブルクとヴァールブルク学派に属するとされている研究者たち（パノフスキー、ザクセル、ビング、ヴィント、ウィトコウア、ゴンブリッチなど）、次に、その周辺にあって彼らと重要な影響関係にあったと考えられる人々（カッシーラ、フリーレンダー、ゴルトシュミット、シュマルツなど）、さらには、彼らとの直接の影響関係を指摘するのは困難であるにせよ、同時期に、図像（イコノグラフィ）への関心に基づいて研究をしていた美術史家たち（ミュンツ、マール、バルトルシャイティスなど）によるテキストを収集し、その内容を分析することが構想された。

②第二の課題解決のために採られたのも、やはりテキスト分析による方法である。ここでは、イコノロジーの新たな可能性を求めするために、イコノロジー以外のさまざまな方法論の検討を行い、それらの長所をイコノロジーの中に取り込んでいくという作業が設定された。具体的には、記号論、解釈学、受容美学、現象学、精神分析、社会史、ジェンダー論、さらには、いわゆる「形態分析」や表象（イリュージョン）分析、図像研究などといった方法論にもとづく従来のさまざまな作品研究に検討を加えることが計画された。

③第三の課題は、上記2課題への取り組み結果をまとめていくかたちで、その解決が図られることになっていた。その作業は、言うまでもなく、報告書の作成によって遂行されることになる。この報告書には、このほかに、いわゆる「イコノロジー」に関わるものだけではなく、広い意味での「イメージ」解釈をめぐる、この3年間に考察を進めてきた論考も併せて掲載することにしていった。たとえば、日本におけるイメージ解釈の伝統と現在、文様装飾の形態とその象徴的意味作用、さらには19世紀末から20世紀初頭にかけてのドイツ語圏における美学や芸術学の展開などといったテーマへの考察は、イコノロジーの生成期において、そのコンテクストとなっていた状況に迫ろうとするものであり、「イコノロジーの再生」を考えるうえで貴重な示唆

を与えてくれることが期待された。

#### 4. 研究成果

(1) 「イコノロジーに関連する多様なテキストの精密な読解」という課題にもとづいて2006年度は、まず、ヴィントの『シンボルの修辞学』(*The Eloquence of Symbols*)の翻訳を完成させ、次に、ルーモールの『料理術の精神』(*Geist der Kochkunst*)についての考察を行った。ヴィントの翻訳は最終的な修正を加えた後に、2007年7月に晶文社から刊行された。これまで日本でヴァールブルクの生涯やその業績についての検討が行われる際にはゴンブリッチによる伝記からの情報に依拠することが多かったために、美術史学を超えた、とくに思想的な角度から見たときのヴァールブルクの業績についての理解が、とかく欠落したり歪曲されたりしがちであった。この翻訳によって、その傾向が是正されることになればと期待をしている。また、ルーモール研究の成果は2006年5月に刊行された『人文論究』に発表した（〔雑誌論文〕③）。この論文では、これまで互いに無関係に論じられてきたルーモールの業績の2つの側面（美味学／美術史学）を有機的に連結して、それが美術史学の成立に対して持つ意味を明らかにした。このほか、この年度には、イコノロジーと自然景観の関係を扱った論文を2本、分担執筆した（〔図書〕①および②）。

(2) 2007年度は、申請書の「研究目的」で挙げた第二の研究課題、すなわち「美術史や、とくに最近の視覚文化研究に見られるイメージ解釈の理論的試みをイコノロジーに取り込むこと」に取り組んだ。イコノロジーの新たな可能性を求めするために、いわゆる「イコノロジー」を超えた、過去や現在のさまざまな方法論の検討を行い、その長所を取り込んでいく作業がこれにあたる。また本年度の実施計画では、これらの方法論を、①解釈主体に関わるもの、②解釈対象に関わるもの、③解釈や解釈対象の外側にあって解釈行為に関わるものという3つのグループに分けておいた。

まず①については、矢代幸雄による、日本美術の「感傷性」への言及について分析を行い、矢代による解釈に対する当時の「叙情的」な芸術思潮からの影響関係を明らかにした（〔雑誌論文〕②）。また、受容美学を美術研究に取り入れたことで知られるケンプによる北斎の『富嶽百景』への解釈についても、学会誌『美学』の「新刊紹介」（230号、2007年9月、87頁）において、その解釈論としての意義を指摘した。次に②については、リーグルによる「様式論」や「記念物保護論」のテキスト分析を行い、装飾文様の伝播や、文

化財保護についての基礎理論の重要性を確認した。2010年春に公刊を予定しているヴァールブルクの写真集『ムネモシユネ』に掲載されている画像の分析も、このグループに関係するものである。最後に③についても、いくつかの調査やその報告を行った。その代表的なものは、2007年10月に北海道大学で開催された美学学会全国大会シンポジウムでの、アイヌの装飾文様についての議論への参加である(2007年10月6日「トムテカラカラ美しくつくる—アイヌ芸術への視点」\*「ム」と「ラ」は促音。報告書は『北海道芸術論評』第1号に収録)。

また、これも予定通り7月には、トルコのアンカラで開催された国際美学会議で矢代についての研究発表を行った([学会発表]②)。発表では、矢代をめぐる単なるモノグラフィーとしてではなく、今回の研究課題一般についても、欧米やアジアを始めとする世界の多くの研究者たちとの有意義な意見交換を行うことができた。

(3) 最終年度となった2008年度の中心的な課題とされていたのは、申請書の「研究目的」の項で言及した、イメージ解釈の手引きとなる「チェックリスト」ないしは「ガイドライン」を含む研究報告書の作成作業であった。申請時には、この報告書を冊子体で印刷する予定であったが、経費や利便性を考慮して、ウェブページ上での公開という方法を採用ことにした。計上されていた印刷費は、原稿の翻訳費や校閲費に充てられることになった。なお、ウェブ掲載という方法を採用したことで、この新しい「イメージ解釈のための図式」は、今後も比較的容易にその内容を更新できることになる。

報告書には、中心となるこの「イメージ解釈の基礎理論」の他に、広い意味での「イメージ」解釈をめぐる、この3年間に考察を進めてきた論考も(既発表の場合は要旨と書誌情報を)併せて掲載する。たとえば、中世のタピスリーにおける「森のイコノロジー」([図書]①)、リーグルが明らかにした文様装飾の形態とその象徴的意味作用([雑誌論文]①)、さらには19世紀末から20世紀初頭にかけてのドイツ語圏における美学や芸術学の展開の中で論じられた「醜」の問題を扱うもの(「醜の美学」の成立とその背景)『醜と排除の感性論』(平成17-19年度科学研究費補助金[基盤研究(A)]研究成果報告書[代表者・京都大学大学院文学研究科准教授：宇佐美文理]課題番号：17202004、2008年3月31日、pp. 49-57所収)などがそうである。これらは、ヴァールブルクやパノフスキーらによるイコノロジーの生成期において、その背景となっていた状況に迫ろうとするものであり、「イコノロジーの再生」を考える上で貴重な示唆を与えるものである

ことが今回の研究で明らかになった。

またウェブ上での成果公開に先立って、2008年8月から9月、および2009年3月にかけて、イタリア、イギリス、ドイツなどに、関連プロジェクトとの連携の中で出張して、専門家たちとの意見交換や資料収集を行うとともに、成果の一部を東京文化財研究所や埼玉大学で開催された国際シンポジウム(「オリジナルとその保存——文化財アーカイブの可能性と限界——」東京文化財研究所(企画情報部)主催、第32回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「“オリジナル”の行方——文化財アーカイブ構築のために——」於東京国立博物館平成館大講堂、2008年12月8日)(「文化財アーカイブ——記憶、写真、ミュージアムとの関わりの中で——」埼玉大学重点研究「ヒューマンインタラクションの解明に基づく人間支援の脱領域的研究」[大学院教育改革支援プログラム「人文学によるスキル開発研究プログラム」])国際シンポジウム「記憶、写真、ミュージアム」(於埼玉県立近代美術館、2009年3月22日)や国際ワークショップ([学会発表]①)、国内研究会(「博物学とやまと絵——19世紀イギリスにおける日本美術収集の文化的背景」科学研究費補助金(B)[課題番号20320025]「YAMATO-Eからみる日・英・米の日本美術史観に関する比較研究」平成20年度報告会、於金沢美術工芸大学芸術学演習室、2009年3月28日)などで発表した。その際、原稿も、可能な限り、ウェブサイトで公開する。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ①加藤哲弘、文様研究の理論的基礎——リーグルによる『様式への問い』をめぐる——、美学論究、査読無、第24巻、2009年、1-15ページ
- ②加藤哲弘、矢代幸雄と日本美術の感傷性、美術フォーラム21、査読有、第16巻、2007年、103-109ページ
- ③加藤哲弘、ルーモールと『料理術の精神』、人文論究、査読無、第56巻第1号、2006年、14-28ページ

[学会発表] (計 2 件)

- ①Tetsuhiro KATO, Aby Warburg in Japan: An Extrapolation, Transcultural Visuality Workshop Series, No. 1, 2009/03/11, University of Heidelberg, Germany
- ②Tetsuhiro KATO, Yashiro Yukio and the

Sentimentality of Japanese Art, 17<sup>th</sup> International Congress of Aesthetics, 2007/07/10, Middle East Technical University, Ankara, Turkey

〔図書〕(計 2 件)

①加藤哲弘／中川理／並木誠士編、昭和堂、東山／風景論、2008 年、182 ページ (1-18 ページ)

②田中きく代／阿河雄二郎編、昭和堂、〈道〉と境界域——森と海の世界史——、2007 年、288 ページ (25-45 ページ)

〔その他〕

研究成果公開ウェブページ

<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/katokitaken2008.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

加藤 哲弘 (KATO TETSUHIRO)  
関西学院大学・文学部・教授  
研究者番号：60152724

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし